広域避難者支援連絡会 in 東京

第 15 回広域避難者支援ミーティング in 東京（クローズド）報告書

平成２９年４月

広域避難者支援連絡会 in 東京 事務局

１　目的

震災から６年が経過。都内の避難当事者団体の状況も大きく変化してきている。特に、被災地の復興や福島県の自主避難者の応急仮設住宅の供与が終了、家族の生活の変化に伴い、都内に避難していた方が新たな地域での生活に移られてきている。当事者団体のメンバーも減少し、一方で当初と比べ団体に関わる市民、ボランティアの割合が増えているところも見られる。こうした中、団体そのものの継続だけでなく、活動規模を縮小したり、内容を見直したりする団体も出てきている。

今回のクローズドミーティングではこうした状況を団体同士で共有することを通して、それぞれの団体の今後のあり方について考える場とし、また、広域避難者支援連絡会 in 東京としても、今後、どのように当事者団体の支援をしていくのか考える場とした。

２　日時　平成２９年３月２２日（水）１０時００分～１２時００分

３　場所　東京ボランティア・市民活動センター会議室Ａ（セントラルプラザ１０階）

４　参加者

東雲の会（江東区東雲地区）／青空会（新宿区）／コスモス会（板橋区）／足立区新田ふるさと会（足立区）／NPO 法人とみおか子ども未来ネットワーク／町屋 6 丁目ミニサロン（荒川区）／東北の絆 サロン FMI 会（町田市）／みちのくまほろば会（西東京市）／福島県被災者同行会／双葉町埼玉自治会／荒川区社会福祉協議会／いたばし総合ボランティアセンター／さわやか福祉財団／災害復興まちづくり支援機構／全労済（全国労働者共済生活協同組合連合会）／中央労働金庫／東京足湯プロジェクト／東京災害ボランティアネットワーク／東京都生活協同組合連合会／東京ボランティア・市民活動センター／東京労働者福祉協議会

５　内容

◇団体の今の状況、課題、来年度以降の予定について

＜青空会（山田さん）＞

退去命令が出てもまだ大丈夫だろうと高をくくっていた人たち 2、3 人が、2 月末からやっと動き出したが、行き場所がなく困っている。貯金を切り崩したり学資保険を解約したり、やっとの思いで生活していた方は、引っ越し代もままならないと引っ越しのボランティアを探している。

百人町アパートに残っているのは 10 世帯以下。集会所でのサロンではなく、我が家を毎日解放して、引っ越し先での悩みなどもいつでも受け入れられるようにしていきたい。密に皆さんと関わっていきたい。少しずつ地域に慣れていきたい。

＜足立区新田ふるさと会（田中さん）＞

昨年は月 2 回サロンがあった。一年を通してはお花見、花火大会、餅付きが大きなイベントで実施した。これまで社協がお正月に西新井大師のお参りを 2、3 回企画してくれたが、今年の冬はなかった。残っているのが三組。行事は昨年同様で考えているが、サロンは月 1 回にする。昨年も寄付をいただき、旅行に行った。今年も寄付をいただけそうなので、川内村に帰郷した

方と合流して出かけたいと考えている。つながりを持っていたい。

＜東北の絆　サロンFMI会（木幡さん）＞

茨城、栃木あたりに永住先を求めている方が多いが、まわりに友達、知人がおらず、ホームシックにかかっている。来年度も相馬などの移転先に出向いて交流会を開きたい。

4 月からサロンを解散する予定だったが、まだまだ困っている方、サロンの力を借りたいという方がいるので、来年も継続することにした。健康で、楽しい一日一日を過ごせるような活動をしていきたい。助成金の支援が少なくなるので、活動内容を考えていかなければならない。ハイキングをかねた施設見学などを考えている。

＜コスモス会（溝上さん）＞

来年残るのが宮城 7 世帯、福島 5 世帯、自主避難者団地内で移動するのが 5 世帯、近くに引っ越した方 4 世帯。支援を続けていく。日帰り旅行など行けたらと思っている。宮城の方は、家が流されて戻る家がない方ばかり。今のところになんとか住んでいければという希望を持って頑張っている。福島の人で行先が決まっていない人がいて、気がかり。母子家庭の方。東京都が熱心に訪問してくれていたが、本人が他人事と思って取り組んでこなかった。収入があるから入れないと思っていたようだが、実際家を探し始めたら高くてどうしようとなった。社協と相談している。サロンは継続する。

＜双葉町埼玉自治会（藤田さん）＞

双葉町には 138 世帯がいる。毎月第一月曜日に役員会を実施している。3 か月に一回会報を出して、来られない方との情報交換の手段としている。餅つき、クリスマス会、親睦旅行、3.11 の慰霊行事を行っている。慰霊行事は社協のホールを借りて、テントに祭壇と花を手向けた。120 数名が参加した。100 人分の花や昼食のうどんを提供していただいた。

4 月 8 日に 5 回目の花見ツアーを実施する。大型バスで、北本の桜や盆栽見学を計画している。光が丘や町田の行事、山下公園のインドのお祭りに招待してもらった。物産を販売したり、双葉音頭を披露したり、できるだけ招待を受けた行事に参加している。

社協、NPO、役場の広場などが入っている建物の 3 階に、自治会の事務所がある。遠くて参加しにくいという声があり、集会所を作ってほしいとお願いしていて、土地探しの段階。双葉町の役場支所を含めた場所で、思うようなことができればと思っている。

＜東雲の会（三澤さん）＞

丸 6 年が経ち、少しずつ縮小していくことを考えている。役員が引っ越していっていることや、自分自身も体調を崩し、世話を焼く人がいなくなっている。芋煮会などのイベントも手伝いをしてくれる人がいない。週 2 回のサロンは継続してやっていくが、細かいことを少しずつ減らしていこうと思う。広域避難者の会は継続していこうと思う。全部与えてもらうのではいつまでも自立できない。そういう時期にきた。社協のことばかり当てにせずやっていきたい。3～4 月は引っ越し料金が高い。早めに対応していかなければいけないと思う。

東雲住宅は今 600 世帯 800 人くらい。国家公務員宿舎は家賃を払えば 2 年間いられることになったので、自主避難で新しいところが決まった人も、キャンセルした人もいる。月に 5～6 戸が引っ越している。思ったほど引っ越しする人がいない。

＜町屋 6 丁目ミニサロン（井餘田さん）＞

6 丁目団地にお世話になっている世帯は、16 世帯あった。一番辛かったのは、一昨年末から続けて一人ずつ亡くなったこと。桜井さんが定期的に回ってくれている。私たちは夫婦二人で 2 年前に引っ越した。良かったと思っている。団地内で当たった方などが出てきた。皆体力がなくなってきている。月 1 回のサロンは継続していく。前向きな気持ちがなくなっている方が多い。良い話がない。希望が持てない。

＜町屋6丁目ミニサロン（桜木さん）＞

区域外避難者で都営に住んでいた方は、全員専用枠に申し込んだ。必ず申し込むようにしつこくお願いした。同じ団地内で3号棟から4号棟でも引っ越さなければいけない方もいた。隣の北区に決まった方、出なければいけないことは残念だった。

サロンは月1回で続けていく。避難者よりも支援者が多い。皆参加すると楽しそうだが、高齢の方が多く、歩いて出かけることが難しい。若い人はホテルからの招待イベントなどに参加している。避難者ではなく、今後は地域の住民として暮らしていけるようにしていくことが必要。

＜みちのくまほろば会（後藤さん）＞

住宅が今一番大きな問題で、会う度にそういった話になる。12人が皆バラバラに住んでいる。転居した方は、周りに誰も友達がおらず、一日じっとしていて、もう一度東京に帰りたいと言っている。再会したが、涙を流して帰りたいと言っていた。

都から、解除になったら帰りますかというアンケートが来た。時計の針を戻してほしいと書いた。自立といっても勇気がない。サロンによく来てくれる高齢の方は、脚やひざが痛く動けないので、タクシーで来る。社協も手伝ってくれない。家族と暮らしている人が、別々に食事を取っている。孤食孤立して悪循環。垣根を外して、市民と交流して仲良くしなければいけない。社協だよりや市報に写真や記事を出してもらったところ、「郡山出身なのですが、青森出身なのですが、参加させてください」という問いあわせがあった。県人会とサロンの人が協力的で、旅行や食事会の準備も手伝ってくれて助かっている。避難者だけの会というのと違って、明るくなってきた。

日本橋のふくしま館に手仕事を売り込みにいったら、7月の4連休に試験的に置いてもらえることになった。まほろば会以外のものも販売できる。人形づくりも教えられるので、声をかけてほしい。

＜NPO法人とみおか子ども未来ネットワーク（市村さん）＞

この3月、4月で状況が一転するだろう。この6年は国や東電にとっての節目であり、避難者にとっての節目ではない。節目は各家庭、個人によって違う。

富岡町が一部解除になって、今までと状況が変わる。同じ避難をしている集まりというイメージだったのが崩れる。ターゲットを絞る、活動を縮小することは、団体としては不本意だが、来年度の活動は形を変えないといけない。

若者たち、子どもたちに対する支援事業をやっていく。子どもたちには仲間づくりの力をつけてもらいたい。福島に戻ったが、もう一度関東に戻りたい若者や、関東圏や仙台などに就職する若者を支援する。支援対象を全国にしてきたが、関東圏・福島県内の若者に絞る。富岡町という枠を超え、福島県避難者の若い世代に何ができるか。いじめ問題などが言われているが、聞いてあげられる大人もいない。3月26日に若者のお花見会をやる。世代間交流をつなげたい。

＜福島県被災者同行会（矢内さん）＞

3月末で解散することになった。2月26日に最後の交流会を実施した。その報告の同行会ニュースを出して、終了する。赤プリに避難していた方を中心に結成され、5年8か月活動した。それなりの役割を果たしたかと思う。2年前くらいから交流会の参加者が減ってきた。

◇意見交換

＜避難解除地域について＞

〇7月に南相馬、小高が解除になったが、戻った人は一割。若い人、子育て世代はいない。子どもの声が聞こえない。昼間は車が走っているが、夜になると電気のついている家はポツポツ。

小高の工業と商業高校が合併して4月に開校する。

〇楢葉は20%が戻っている。家の取り壊しが進んでいて、更地になっているところが多い。作隣町では、元々の町の人口より作業員の人口が多い。仮置き場から中間貯上施設への6号線が渋滞している。小中学校が29年度から再開するとのことだが、10数名しか戻らない予定。

＜被災地の撮影映像について＞

〇三宅島の全島避難の時、高齢で一時帰宅の際に帰れない方たちがいた。メディアでは家の周りの状況まで放送しない。作業員の人たちがハンディカムで取った映像を貸しだして、皆でサロンなどの場で見た。これが島の人たちにとってありがたかった。福島でも、6年間一回も帰れていないという人がいると思う。見たくないという人、見て良かったという人いる両方いると思うが、子どもの時に遊んだ公園、高校など、思い起こさせる風景などを撮影し、上映してはどうか。

〇映像を見たいわけではない。現地に行きたいが、脚がない。また、ドローンは町でやっている。実際に見るのとは違う。愛情が詰まっているから故郷。更地になって誰もいない映像を見ても幻滅を感じる。気持ちの整理がついていないのに映像は見たくない。

〇相双ボランティアという団体が期間困難区域に入っていて、ドローンで撮った映像も持っている。必要があれば提供できる。

〇本音ではお墓もあるし、帰りたいが、コミュニティはしっかりしていない、医者がないというところで残りの人生を過ごすことを考えると無理。

〇双葉の映画祭、浪江の映画祭で映像が流れたことがあったが、実際に自分の家が流されている映像を見て、残念がってもう映画祭に参加したくない、見なければよかったという感想が多かった。

〇15歳未満は近くにいけなかった。6年経つと自分の家がどうだったか忘れている。15歳になって、一度見てみたいという子もいるかもしれない。

＜社協や地域の団体とのつながりについて＞

〇江東区社協は予算がつけば大丈夫だろうとのこと。孤立化防止事業の予算。危機管理課と社協が連絡を取ってやっている。

〇板橋区社協も継続予定と聞いている。

〇荒川区社協も継続。ボランティアと避難者が力を合わせてやっている。

〇なぜ東京にある社協にばらつきがあるのか？

→　社協は全国都道府県区市町村にあるが、指揮命令系統はない。各地域で独立して判断している。避難者の多い地域は孤立化防止事業をやっているところが多い。災害事業に力を入れている地域かどうかというような影響があると思う。

〇ふるさと会は、社協にサロンの部屋を借りている。自分たちが企画して、そこに社協が乗る形が多い。年間でサロンに集まった人数によって現金をもらって、お餅付きに使っている。

〇加須市には195所帯、101軒の双葉町民がいる。双葉町の役場がある。加須市では、市長が最後の一人まで手を差し伸べると仰っていて、年に一回加須市の各家庭を回ってくれている。去年から民生委員が各家庭を年に2回訪問することになった。社協の事務所に申請して場所を借りている。体操教室や男の料理教室などのプログラムをやっている。一昨年、白河警察が巡回して撮影した映像（「双葉町の今」）を上映した。作業員は楢葉やいわきから通っているが、双葉町に住みついてほしい。町の存続のためには、町民が何人かというのが大事。

＜子どもについて＞

〇子どもが二人小学生の時に避難してきて、中学生と高校生になった。帰りたいと言わない。東京が故郷になっている。お墓参りに行ったら自分の家の庭にイノシシがいて、仕掛けた罠にか

かっていた。こういう状況を見ると帰れないと思ったと言っていた。

〇避難の話をしていない家庭が多いと聞く。進学するときなどのタイミングで、あの時こう思っていたという話を聞いたりするそうだ。

〇いじめに遭い、登校拒否になっていた当時1年生、3年生、6年生のこどもたち。1年半経ってやっと学校にいけるようになった。東京に友達ができ、田舎の写真を見せても帰りたくない、今のほうがよっぽど楽しいという。今は高校に進学している。

〇避難元に住所がない子たちは、今住んでいる自治体から成人式の招待状が来る。知らない人たちと成人式に出席することになる。

＜その他＞

〇除染した土を双葉町が受け入れている。中間貯蔵施設として予定されている。帰還しても土がある。土と瓦礫、燃えるゴミを分ける施設を作っている。民地の買収が進んでいないようだ。反対している人もいる。

〇それぞれの団体が抱えている状況、特に住宅の問題。どういうように皆選択していくのか。サロンは回数が減っていったり、なくなっていく。当事者団体だけでなく、社協中心にやっているサロンも同じような状況。解除される地域が増えていき、来年度から状況がガラッと変わっていく。連絡会としてどういう関わりができるのか考えていきたい。皆さんから地域の声、避難者の方の声を聞いていきたい。

６　主　催　広域避難者支援連絡会 in 東京

※タケダ・赤い羽根広域避難者支援プログラムの助成により実施した。

７　問合せ　広域避難者支援連絡会 in 東京

（事務局）東京ボランティア・市民活動センター

電　話　03-3235-1171　FAX 03-3235-0050　メール　kouikihinan@tvac.or.jp

以上